

週刊金曜日

2005 No.569  
8|12・19合併号

2005年8月12日発行 1993年10月29日第3種郵便物認可  
第13巻第33号通巻第583号

編集委員 石坂 啓/落合恵子/佐高 信  
椎名 誠/筑紫哲也/本多勝一  
毎週金曜日発売 定価500円

## 姜尚中

最悪の道を防ぐには「健全な保守」に期待

斎藤貴男・佐高信・辻井喬

伝統的欠陥と新しい墮落

國弘正雄・袖井林二郎・筑紫哲也

憧れから従属へ 米国とのいびつな関係

天野恵一・辻子実・吉田裕

靖国・戦争責任  
そして真の歴史認識

# 「この国のゆくえ」

敗戦 60 年 特集

# 60



ジェームズ・マカイ氏が著した『上層部の裏切り』。

# ネット社会を独り歩き 捏造された 佐渡島虐殺事件

オーストラリアでは戦死者より戦時捕虜(POW)の死亡者が多いという。第二次世界大戦中、日本軍はしばしば捕虜となった外国兵を虐待していた。その類の話は多いが、実は日本に賠償交渉を求めるためのプロパガンダで使われた場合もある。専門家不在の隙間で捏造される捕虜問題の実態を検証する。

## グレゴリー・ハドリー ジェームズ・オグルソープ

日本軍に捕らえられた連合軍捕虜とその支持者たちには、核となる幾つかの信念がある。

ほとんどの人は、彼らに対する扱いがナチス・ドイツの捕虜よりひどかったと考えている。ドイツ政府と強制労働者を使った企業は、元捕虜に対して賠償を支払ったが、日本は一九五一年のサンフランシスコ平和条約で賠償を免れたという。元捕虜たちは、裁きはきちんと行なわれておらず、日本の政府と企業のエリートたちは戦争中の虐待に対する責任を回避し続けてきた、と考えている。

また東京裁判は戦争中の残虐行為に責任ある人間を十分処罰しておらず、多くの戦犯と残虐行為が取り調べも行なわれず、処罰されないままになったとも思っている。

このような癒やされていない苦しみと不信感が、歴史を理解する上で「陰謀説」を生む土壌になっている。今日のようにインターネットが発達して、地球が一体化している時代には、捏造やあからさまな虚偽の宣伝でも、コンピューターウイルスのようにたちまち恐るべき勢いで広まってしまふ。

ここで取り上げるのは、戦争末期に新潟県の佐渡島で連合軍捕虜が虐殺されたとされる事件である。ニュージーランド人のジェームズ・マカイ氏は、一九九六年に出版した『上層部の裏切り』の中で、第二次世界大戦中、日本軍が連合軍捕虜に対して行なった残虐行為に関する秘密軍事報告を発見したと書いた。

マカイ氏によればこれらの報告は、一九四〇年代後半、東京にあったオーストラリア第二戦犯罪課に所属していたニュージーランド人の故ジエームズ・ゴドウィン大尉が秘匿していたという。ゴドウィンはこれらの資料を基に本を書こうとしていたが、健康が悪化し、マカイ氏はゴドウィンの死(一九九五年)の直前、この仕事を引き継いだと言っている。

### ファイル125M

『上層部の裏切り』の中でもっとも

衝撃的なのは「ファイル125M」という報告書だ。これは一九四五年、佐渡島の相川金山(佐渡金山)で、三八七人の連合軍捕虜が虐殺されたとされる事件の隠蔽工作について、驚くべき詳細を伝えている。それは一九四九年にゴドウィン大尉によって行なわれた元陸軍士官ツダ・ヨシロ中尉への尋問を記録したものとされている。

「ファイル125M」は出版から九年経つても、いまだに世界中で目にする事ができる。「上層部の裏切り」はオーストラリア、ニュージーランド、英国で限定出版された。中国語の翻訳も三万部以上出版され、中国国内で広く読まれた。もしインターネットの英語版グーグルで「Sad

o、「POW」、「Massacre」と入力すれば、ファイル125Mを取り上げている多くのサイトを見つけてことができるだろう。これらのサイトは毎日数百のヒット件数があり、佐渡島の事件についての報告書は、世界中の人々に読まれている。

困ったことは、ファイル125Mが歴史的な事実として、軍事史を扱う多くの本に取り上げられていることだ。これまでに少なくとも三冊の本が佐渡の虐殺事件を事実として伝えている。スターリング・シーグレイブ、ペギー・シーグレイブ著『黄金の戦士』、シルバー著『パリットスロンの橋』、ギリアン・ニカキス著『彼は帰郷しなかった』である。

## 『上層部の裏切り』のウソ

現在までに、多くの人が佐渡島虐殺事件を事実として受け入れてきたわけだ。第二次世界大戦中に連合軍捕虜が日本で受けたひどい扱いを考えれば、捕虜が強制労働のためほかの鉱山へ送られたのと同じように、相川金山へも送られたとマカイ氏の読者が考えるのは無理のないことだ。ファイル125Mの出版によって多くのの人々、特に行方不明兵士の家族たちは、数百の連合軍捕虜の遺骨がまだ相川「金山」の奥深くに、埋もれていると考えるようになった。

しかし『上層部の裏切り』は誇張と真つ赤な嘘に満ちている。

## 偽りの「ファイル125M」より 捕虜の処刑、佐渡島相川。 1945年8月2日

(A) 佐渡・相川POW收容所元副所長 ツダ・ヨシロ元中尉への尋問再開。ツダは再び、証言している「上からの命令」の実行にかかわった容疑について、厳しく尋問された。日本本土が侵攻されるか、日本が軍事的に敗北した場合、POWの処分を特に命じていた帝国陸軍捕虜処分命令を、彼は否定しなかった。

(B) ツダによると、相川收容所にいたPOWはすべて欧米人で、米国人、オランダ人、オーストラリア人、英国人の兵士からなり、1942年以降、強制労働のため島へ輸送されてきた。捕虜処分命令が前に出されていたため、ツダは大量の戦争捕虜を処分(殺害)することに何の疑いも持たなかったと話した。この説明を補強するためツダは、佐渡島に関する限りこの陸軍命令は撤回されていなかったと指摘した。したがって彼はサダキチ少佐と同じように、上からの命令に従っただけだ。

(C) ツダ・ヨシロはさらに尋問したところ、POWの処刑に続く数日の間、POW收容所を解体し、捕虜の痕跡を抹消するため多くのことが行なわれたことを明らかにした。この大虐殺の直後、2つの原子爆弾が日本に落とされ、無条件降伏となった。2番目の原爆が落ちた直後、相川收容所のすべての警備隊将兵は家に帰る許可があり、陸軍の異動命令を待つように言われたとツダは証言した。この極秘の残虐行為があまりにひどいものであり、陸軍も知っていることだったので、帝国陸軍は相川の兵員はすべて関東軍で兵役に就いているかのように偽る、期日のさかのぼった異動命令を出した。将校は戦闘中行方不明か死亡とされた。

ファイル125Mはマカイ氏による捏造であり、第二次世界大戦中の佐渡の歴史的な真実をまったく反映していないことを示す明白な証拠がある。われわれは資料によって裏付けられている日本軍が中国、朝鮮、東南アジアで犯した残虐行為まで、疑わしいとして歴史の修正を試みる一部の人を支援するつもりはない。だが、佐渡島について広まっている虚偽の情報は正しておく責任があると考ええる。ファイル125Mは第二次世界大戦中にこの島で起きた実際の歴史とは異なるからだ。

第二次世界大戦の末期には確かに、相川に強制労働收容所は存在した。しかし使っていたのは以前鉱山で契約していた朝鮮人労働者たちだ。一九一八年、三菱鉱業が相川金山を管理下に収めたとき、三菱の日本人労働者を補完するために朝鮮人労働者を雇用した。一九四四年になつて、三菱鉱業は生産するすべての銅鉱を軍需用に提供することを求められ、相川金山は強制労働收容所になった。朝鮮人が逃亡するのを防ぐため警備が強化され、労働契約はいとも簡単に無効にされ、朝鮮人労働者の賃金は大幅に引き下げられた。

最終的に伴い、五八〇人の朝鮮人労働者は本国へ送還された。これらのことは佐渡島の郷土史家やお年寄りの間ではよく知られている。佐渡島に欧米人がいなかったことをさらに裏付けるのは、元ニューヨーク州最高裁判事ロバート・グローク氏だ。彼は一九四五年末に、新潟に駐在した最初の米戦争犯罪調査官の一人だ。彼とそのチームは新潟県の戦争捕虜收容所を探し回ったが、佐渡島では連合軍捕虜の証拠を見つけないことはなかったと、述べている。

強調しておきたいのは、戦時捕虜收容所があったところには、いつも何らかの証拠が残されているということだ。絵はがきであったり、收容所から移動させられる個々の捕虜であったり、あるいは(朝鮮人のたばこ割り当てのような)文書などだ。われわれは相川の郷土史家、斎藤本恭氏にも連絡を取った。斎藤氏は相川金山の歴史の研究と保存に力を入れてきた。われわれに代わって彼は、鉱山で連合軍の捕虜が働いていたことを聞いたことがあるかどうかを調べるため、相川のお年寄りと話した。戦争中、相川に白人がいたというようなことはだれも思い出せなかったと彼は報告している。

新潟の研究者、広瀬貞三氏は、さらに幾つかのおもしろい事実を明らかにしている。彼は相川における強制労働に関連した歴史文書を調査し

# 皇軍の捕虜



ており、連合軍の戦争捕虜がそこに送られたことに触れたものは見ていないという。朝鮮語も話せる広瀬氏は、相川金山の朝鮮人の生き残りに話を聞いたが、だれも連合軍の捕虜がいたと話しはしなかった。「ファイル125M」は、一九四二年には相川に連合軍捕虜がいたと述べている。しかし元戦争捕虜と郷土史家によると、新潟県の直江津(現・上越市)に最初の連合軍捕虜が来たのは一九四二年二月一日のことである。連合軍捕虜三〇一八人が新潟県内に送られ、港湾荷役やエンジン部品を作る小さな工場で働いた。これらは、出征した日本人労働者に代わる労働力を必要とした船会社、製造業の一九四二年の要求に応えたものだ。

一九四三年には相川金山に、六〇〇人以上の朝鮮人労働者、七〇〇人以上の日本人労働者がいたと、広瀬氏は書いている。われわれの聞き取り調査で彼は、新潟のような都市部のほうが連合軍捕虜の管理は易しかったのだから、遠く離れて人口の少ない相川へ送ることは現実的ではないと述べている。ほかの郷土史家である植村敏秀氏、藤塚明氏も、連合軍

捕虜は相川でなく、労働力が不足した新潟市へ送られたと語った。

## 圧力団体の顧問だった

マカイ氏の作り上げた話には、鉱山の所長サダキチ・マサミ少佐と、副所長ツダ・ヨシロ中尉という名前が出てくる。収容所将校は訴追を免れるため、公式には戦死あるいは戦闘中不明とされたという。もしそうであるならば、彼らの名前は名簿にあるはずだ。

おかしなことだが、マカイ氏が所長に与えている「サダキチ」という名前は、日本の姓としてはほとんどありえない。通常は男の名前として

だけ使われている。それだけ珍しい姓なら、公文書の中に簡単に見つかるはずだ。しかしオーストラリアの歴史家アルバート・スピア氏がサダキチ・マサミあるいはツダ・ヨシロという名前に関連する資料を、東京の国立防衛研究所に求めたところ、名簿にはそのような人物の軍歴はないとの回答だった。

マカイ氏は、ツダ・ヨシロは一九四九年巣鴨プリズンに拘束されていたと書いている。しかし巣鴨プリズンの記録を徹底調査した結果、そのような人物は占領軍によって拘束されていたことはなかった。

『上層部の裏切り』の序文でマカイ氏は、その前に出版した『連合軍と日本の共同謀議が「根拠のない」主張であると批判されたことを明らかにしている。彼はその本で米国政府は日本と共謀して、戦争中の残虐行為を隠蔽したと書いていた。

『上層部の裏切り』は、サンフランシスコ平和条約第一四條(連合軍の元捕虜に日本に対する損害賠償請求権を放棄させた)は正義にもとするとする彼の政治的見解を支えており、米国は戦争犯罪被告人に寛大すぎるといふ彼の認識を補強するのに必要だった「証拠」を提供している。

インターネット上では、日本軍による虐殺リストとして「SADO」の文字が見つかる。マカイ氏はわれわれが調査

結果を突きつけて対決する前に、二〇〇四年三月死去した。残念なことに彼の娘は、彼のほとんどの文書を死後間もなく廃棄していた。

しかしマカイ氏の遺族は、残されていた彼の文書をわれわれが見ることを許してくれた。これによってマカイ氏は、日本の捕虜になっていた人が賠償を得られるよう米国議会に働き掛けていた米圧力団体の顧問になっていたことが明らかになった。

多くの元捕虜たちは、第一四條が公平でないとみていただけでなく、もし日本本土に連合軍が侵攻すれば日本にいた連合軍捕虜はすべて処刑される予定だったと強く信じていた。この計画の直接的な証拠はこれまで出たことはないが、台湾で見つかった一九四四年のメモは、大量の捕虜を処刑する方法について説明を求めていた。

「ファイル125M」は特に、そのような「帝国陸軍捕虜処分命令」があったと主張する。マカイ氏の意図は、現代の政治論議に影響を与える何らかの「歴史的証拠」を与えることだったようだ。「上層部の裏切り」を米国の議員を含むロビイストに渡し、佐渡島の「虐殺」を強調していることが個人文書から見て取れる。

翻訳/鈴木正徳、写真協力/石郷友仁

Gregory Hadley・新潟国際情報大学。  
James Ogilthorpe・ニューサウスウェールズ州ロイヤル・ユナイテッド・サービス・インスティテュート。